The Japan Society of Educational Sociology

女性の自律意識とコミュニケーション活動

○神田道子（東洋大学）
沖　妙子（お茶の水女子大学研究生）

1．問題の所在

1975年以降，婦人問題解決が国際的に共通の課題になってきており，その基礎的部分として，性による固定観念，性別役割分業観の変革が求められている。それは長期間にわたって当然のこととして無批判的に同調してきた価値観や生活慣習を自律的にとらえなおすことを意味する。そこで女性の自律意識を問題にするに際しては，まず，これらの伝統的な性役割観にたいする意識が重要になる。

これまで性役割意識研究を行なってきているが，婦人問題の現実から，さらに明らかにする必要がある重要な点として，次のことがあげられる。

(1)．性役割意識の流動化が生じており，固定的，伝統的な性別役割分業観は減少しているが，もっとも多いのは，依然として分業観の範囲に含まれる「兼業的分業観」である。この意識の構造及びそれを支持する層について，さらにくわしく分析する必要がある。

(2)．役割分業観を脱して，「平等的共業観」を持っている層は，孤立感，無力感を持っている者が多いという傾向が明らかになっている。自律性は他の人との関係性を通して深まっていくと考えられること，また，婦人問題の解決に際しては自律的な個人が，つながりを持ち集団をして社会的に活動することによって発言力が強くなると考えられることからみて，自律的な女性が孤立していく傾向は問題である。自律的な意識を持っている層は孤立的であり，幅広い人間関係を持ち活発なコミュニケーションを行なっている層は意識に問題があるのではないかと考えられるが，この点を明らかにする必要がある。

2．本研究の意図

調査研究によって，上記の課題を求明することを試みた。具体的には次のような点である。(1)．性役割観が大きく変化しているのは，どのような属性を持った層か，特に学歴はどのような意味を持つか。(2)．自律意識の内容として，性役割にたいする意識と一般的な依存的態度とはどのように関連しているのか。(3)．経済的自立＝職業を持つことと自律意識はどのように関連しているのか。(3)．家族，友人との関係，近所つきあい，社会的学習活動及び社会活動への参加を内容としてコミュニケーション活動をとらえたときに，どのような傾向がみられるのか，属性との関連はどうか。(4)．自律意識とコミュニケーション活動はどのように関連しているのかなどである。

3．調査の概要

(1)．調査の対象及び方法

調査対象－東京都に居住する16～69歳の女性，1500人，調査方法－質問紙を用いた訪問個人面接法，調査時期－1985年9月，有効回答数－941人，(62.7%)

（なお，本調査は東京都の委託によって，女性のマスメディア接触と意識との関連を明らかにすることを目的として行なわれた。実査は日本リサーチセンターに依頼した。）

(2)．回答者の属性

(a)　年齢構成

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

全体	16歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
100.0	6.2	20.3	26.7	20.3	16.6	9.9
941人	58	191	252	191	156	93

(b) 学歴構成

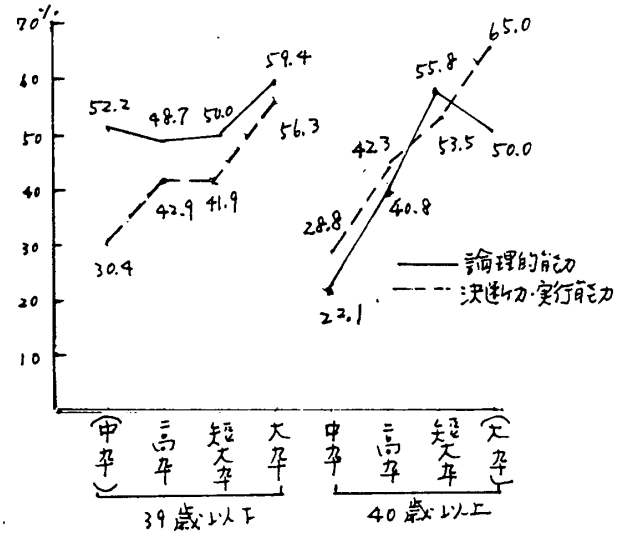
	全体	16~39歳	40歳以上
中卒	14.0	5.4	23.9
高校卒	55.5	51.3	60.2
短大・専門学校卒	19.4	27.9	9.8
大学・大学院卒	10.1	15.0	4.5
無回答	1.0	0.4	1.6
全体（実数）	100.0 (941人)	100.0 (501)	100.0 (440)

4 調査の結果

(1). 自律意識，コミュニケーション活動.

(a)、全体的傾向として，若年層，高学歴層に自律意識が高い者が多いが，依存的態度については，若年層に少ないという傾向はみられない。(b). 短大卒の女性は39歳以下と40歳以上では，学歴による意識傾向がことなり，39歳以下では，高卒と同様の傾向がみられる。

平等的能力観（男女差なし）



(c). 既婚でフルタイムで働いている層，就業年数の長い層に性差別を感じている者が多く，平等的共業観も多い傾向がみられる。(d). 性差別感と性役割に関する意識との間には関連がみられる。(e). 社会活動と他のコミュニケーション活動との関連を総合的にみると，次のような傾向が明らかになった。「社会活動不参加層」は，家族，友人との話し合い，近所つきあい，学習活動のすべてにおいて，参加層と比較して不活発な傾向がみられる。参加層では，参加している団体・グループの性格，活動内容によってことなる。「PTA」「町内会・自治会」参加層と比較して，「消費者団体等自主グループ」参加層は，家族，友人との話し合い，近所つきあい，学習活動ともに活発である。参加者がもっとも多い「趣味・スポーツ」参加層は，積極的参加者が多いが，学習活動や近所つきあいでも，それに関係した内容が多く，一定の傾向性がみられる。

(2). 自律意識とコミュニケーション活動との関連

「兼業的分業観」を，「能力観」「依存的態度」「夫の決定権」にたいする意識によって，「依存的」「やや依存的」「自律的」「やや自律的」の四つに分け，固定的な「伝統的分業観」「平等的共業観」も含め六つの意識層について，その特徴を分析しコミュニケーション活動との関連をみた。(a). 全体的にもっともコミュニケーション活動が活発なのは「やや依存的な兼業的分業観」「やや自律的な兼業的分業観」を持っている層である。(b). 自律意識では，両極にある「伝統的分業観」「平等的共業観」を持っている層は，ともにコミュニケーション活動は不活発な傾向にある。

以上のような調査結果から，導きだせる問題点及び課題については当日発表する。

NII-Electronic Library Service